

岡 哲兄

私は去年の暮れから勉強してゐます。

大晦日も元旦も朝からゴム焼きをしました。

いまだに仕事を続けてゐます。

実によい気持ちでやつてゐます。

よいお天気で自分の思つたようにいつた日は、こんなよいお天気の日にいゝ気持ちで仕事したことを感謝します。

また若し氣にいらぬ時でも、こゝやつて健康体で自分のやりたい事をしてゆける自分の身体を心から感謝します。(私は虚弱で直きに病氣するのですから身体の工合のよいのが実にありがたいのです。)

しかし、ちつとも作品は出来ません。

これは、ゴム焼きの稽古をしてゐるのですからあたりまえのことです。

いゝものを作らうなどゝ思ふのがまちがつてゐます。

去年はちつとも一九一九年作として残しておけるものが出来ませんでした。

それに去年はまつたく写真をやる時が来なかつたのです。

春は鶴沼にゐました。

鶏の世話をして毎日玉子の数をかぞへて楽しみました。

初夏から神保町に兜屋画堂を開いたので、とても写真のことを考へる時がありませんでした。

暮れになつてやつとおちつきが出来たのでゴム焼をはじめたのです。

この二三年は写真から割合ひに離れてゐました。それは絵の稽古をはじめたせいもありますが、また、うまく出来なくて迷つてゐたせいもあります。其おかげで写真の実体(写真がこの世の中に存在する意義です)がすこしづゝ見えて来たような気がします。

君が三笠にゐた時分は先輩顔をして君にいろいろのことをさも／＼偉らそうに説明してゐましたが今からみると恥かしい気がします。

私は何んにも知らぬ。全く無学の一書生に過ぎません。写真の実体がすこしでも見えてきたような氣のする今日、私の貧しき頭、貧しき腕、まして根の浅い心ではどうすることも出来ません。

写真に自分の心(私の心を透して見た自然……結極^(マヤ)は私の人格の表現……)を生すにはどうするか……

私は美術写真とか芸術写真とか云ふ言葉をやたらに用ひますまい……この言葉を安価に解釈して、そして安価なものを作つておられないのですから。私の心から生れ出たものは私自身では唯の普通の写真のつもりでゐても私の心を見ってくれる人々には私の尊い心がそれに生きてゐることを見てくれます。

私はそういうものが作りたいのです。

自然のゆつたりした気持ちになつて普通の写真を作りたいのです。
絵のやうな写真だなど、云はれて嬉しがつてゐては駄目です。

写真には写真の世界があります。

写真の世界に作家が生きていなければ駄目です。

頭も作りたい。

腕も作りたい。

一番だいたいな心を大切に育てたい。

ともかく勉強することです。

私は私の進むべき道をどこまでも歩るいてゆきます。

一生の仕事です。

解題

日本「近代写真」の確立者

野島康三は、まさに日本の「近代写真」の確立者の一人といえるだろう。一九〇九年、アマチュア写真家団体、東京写真研究会に入会した彼は、すぐに若手の有力作家として頭角をあらわしていく。初期の作品は、絵画的な美意識が色濃いロマンティックな作風だが、それまでタブーとされていたヌードに積極的に挑戦するなど、写真を芸術表現として真摯に追求していくという意欲がみなぎっていた。

大正半ば以降になると、モデルと正面から対峙し、その個性を画面に刻みつけるような人物写真に取り組むようになる。同時に、神田神保町に兜屋画堂（一九一九〜二〇）を開設し、梅原龍三郎、中川一政、関根正二、村山槐多らの作品を展示するなど、大正の美術界を支えるパトロンの役割も果たした。

一九三〇年代以降になると、野島の作風は大きく転換する。ドイツを中心として興った「新興写真」の影響を受け、それまでの絵画的な技巧を捨てて、写真本来の精密でストレートな表現力を生かす、大胆な実験作を次々に発表しはじめるのである。木村伊兵衛、中山岩太とともに



〈樹による女〉 1915
（京都国立近代美術館蔵）

に創刊した月刊写真雑誌『光画』（一九三二〜三三、二号から伊奈信男が同人に加わる）がその舞台となった。

残念なことに、元来体が弱かったこともあって、一九四〇年代以降は目立った活動をする事ができなかったが、それでも一九三九年、福原信三とともに国画会に写真部を設立し、審査員をつとめるなど、戦後までその影響力を保ち続けた。

ここにおさめた「朱雪雜記」は、一九二〇年に『写真月報』誌に野島熙正の名で、四回にわたって掲載したエッセイの最初的一篇である。野島はこの年、「第十回東京写真研究会展」の第三室を全部使って、全三十三点の「個人展覽会」を開催しようとしていた。そのうち三点のヌード作品が、風紀紊乱を理由に警察に撤去されるという事件を引きおこしたこの展覽会に向けて、彼の創作意欲が大きく高まっていたことが、張りつめた文章の調子にうかがえる。

彼が経営していた三笠写真館（一九一五〜二〇）に勤めていた岡哲に宛てた書簡の形式をとった「雜記」で、野島は昨年以来の近況を率直に吐露し、写真作家としての進むべき方向を模索しようとしている。「写真に自分の心（私の心を透して見た自然……結極は私の人格の表現……）を生ずにはどうするのか……」という問いかけには、典型的な大正ロマンティズムの息吹きを感じとることができる。野島は画廊の活動などを通じて、岸田劉生や萬鉄五郎と面識があり、「自然」「人格」「個性」といった言葉によって、自己を高らかに主張しようとしていた彼らと、同じ時代精神を共有していた。この時期の野島の仕事は、岸田の草土社や彼らと密接な関係を持っていた同時代の『白樺』の作家たちの活動と重なりあっているといえるだろう。

野島はさらに言葉を継いで、「絵のやうな写真だなど云はれて嬉しがつてゐては駄目です。写真には写真の世界があります」と言い切っている。絵画の構図や陰影表現を模倣し、その美意識に追隨してきた写真の世界に、ようやく固有の方法論を模索しようとする動きが芽生えようとしていた。この「朱雪雜記」は、その最初の宣言の一つでもあった。

野島が「朱雪雜記」を掲載した『写真月報』についても一言触れておこう。一八九四年に創刊され、当初は写真材料商の草分けであった小西本店（現コニカ）のアマチュア向け宣伝誌の要素が強かったが、明治三十年（一八九七）代以降、東京写真研究会の写真家たちが積極的に寄稿することによって、「芸術写真」の拠点の一つとなっていく。戦前におけるアマチュア写真家たちの意識の高さが、その誌面にもよく反映されていた。